



専門はなし!
埼玉の出身で、研修時代には消化器外科中心に移したという先生は「しかし、専門を伺った」とありませぬ。ただの医師です」と敬順に答えたい。幅広く診察するため総合診療ともいえるようですが、そうし既存のカテゴリーに収まらないことが自身にとっての重要なアイデンティティだという。
先生が泰阜村と縁をつなぐには平成20年5月、北杜地域の医療機関に来たばかりの頃、当時の泰阜村長が新聞に寄稿したコラムを読んで強く共感していた。思い通り、その後も連絡を取っていき、村の診療所に来ないかと声がかかったという。

医療を総合的に振興したいと考えていた先生は、この医療アクセスが良好とはいえない山村は自分の求めていたフィールドと感じ、技術、平成24年に診療所長に就任した。

コミュニケーションこそが診療
実に手早く診療をめる先生は「よく3時間待ちの3分診療なんて医療批判があるけど、私は早い時は10秒も。もちろん必要な場合や、面白い話が飛び長くなる」と笑って話す。短時間で患者さんの訴えにくく耳を傾け、丁寧に聞き取っていく。
患者さんが家から出て家に帰るまでの一連のコミュニケーションが一つの診療プロセスと先生は捉えている。看護師や、待合室で会う人、送迎車のドライバーなど、地域内でコミュニケーションがとれるように先生は考えている。看診だけでなく、会話にはその場にはない人の名前も次々出てくる。隅々まで見るササエなかな」と地域密着の診療らしい感想がうかがえた。

村人同士として接する
診療にあたり先生が心掛けていることは、ありのままの自分で行くこと。着任とともに泰阜村に移住したため、村の人たちと先生の人となりをよく知っている。だから、自分を待らず素直な気持ちで患者さんへ接することを大切にしているという。
そんな考えからか、「一人一人の患者さんに対して、医と患をいう以上に村人同士だと捉えている」という。「医師と患者という関係性から自由に患者という一括り」と思いつながら、患者という一括りではなく、目の前の個人に注目し、寄り添うとする。一方で、「もっとと種力性の医療活動をも



患者での待合スペース

なんと先生は大学生
先生は言葉遣いがとても巧み。現在、診療の合間を縫って東京大学文学部で学んでいる聞き、合点がいった。文学部なのは、村の診療を通じて、近代社会におけるケアや存在の意義などについて多角的に研究が必要と感じたためだ。



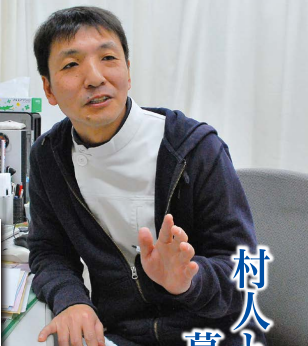
患者さんのお手紙、とても甘い干し柿

する医師の方が望ましいのでは」と悩むこともあった。それも「柿づた」として、柿を削りてくれる患者さんとの関係性を無二のものとなし、自身の医療観と公益性をすり合わせてながら、ちよつといいラインを模索してきているのだ。

地域医療最前線



○診療所の概要（令和元年実績）
平均外来患者数：200人/月
平均訪問診療患者数：10人程度/月
職員数：7人
（医師1、看護師3、事務2、送迎担当者1）
併設機関：保健福祉支援センター



泰阜村診療所
島田 恵太 医師

村人としてともに生き暮らしていくために



新の積まれた診療所外観

下伊那地域にある泰阜村は、天竜川の東に位置する人口1,600人あまりの小さな村だ。山科が総面積の86%を占め、道路の両脇には高松笠を生かした田圃が広がる。村の花であるカタクリを模したかわいらしい街灯が、いたるところに設置されている。
信州サンセットポイント百選に選ばれている「あいパーク」や「サマーポス」や「パターゴルフ」などのスポーツが楽しめる。暖かくすると、希少種のサユエリが咲き乱れ、ハッポウトンボやサヤマダラが訪れるという。
飯田市から村へ入り、山に沿ってカーブを進むと見えてくる「泰阜診療所」の看板。今回の取材先だ。朝早いながら、深い霧に喜劇しながら屋頂を撮影した後、診療所内で所長の島田恵太先生からお話を伺った。



ゴルフコースもあるあひろくやすおか



整えられた新田が並ぶ

高齢で慢性疾患の患者さんに対しては、疾病の治療という感覚はあまりないという。取材にお会いした人たちは、皆さん「んんん、おつらつら」としていた。先生が重視する地域でのコミュニケーションの作用かと推察できるが、それを客観的に証明することは難しい。先生は「医療は客観性、エビデンスを前提しなければならない」とされてきた。でも、エビデンスを選択する行為は、人間の主観に依存していると考え、最後には主観が重要だ」と思っている。疾患名にこだわらず、患者さんの訴えにまっすぐ耳を傾けるように先生は、その根拠に触れるように感じられた。



送迎車と訪問診療

ローターリー前に停車する赤い車で、患者さんの送迎も行っている。電話で依頼できるため、免許返納後も安心して通診することができたと患者さんが教えてくれた。また、火曜日・金曜日の午前中は外来診療



福祉・介護との連携は緊密で、隣接した保健福祉センターでは、介護部門や包括支援センター、社会福祉協議会などが集まって毎月ミーティングを行っている。リアルタイムでの伝達にも力を入れ、関係者間ではほほレペルの情報共有がなされているという。特徴的なのは、とにかく対応が迅速なこと。例えばある人に介護用ベッドが必要と判断すると、その日のうちに搬入して使用可能にする。計測の変更や手洗いは必要とやんやんと。その時その人に必要と対応することが最後先という方針だといふ。

命を巡ってつながる

一方で、この地域の限界を越えてきている。と先生は打ち明けて、「医師として何をするべきかと悩まざると、いわゆる医師の仕事やないことの方が必要だと」結論づけていくことと、話を具体的に伺ってみたいと、牧場を始めたとのこと。馬や牛を



訪問診療の様子「カメラで緊張しちゃった」と患者さん

の合間に訪問診療も行う。一件の訪問診療に同行させていただいた。玄関から大きな声であいっしつと患者さんの部屋へ向う。先生が椅子を聞き取り、同行した方々の看護師が手際よく血圧を測り、検査を確認する。介護サービスの利用状況などを確認し、その場で薬の処方も行われた。診療後、患者さんからは「診療所にいらなくても、先生が来てくれたからありがたい。看護婦さんも優しい」とお話を伺えた。その日帰った中には、ガードレールのない細い山道に、切り返しながら下った先の宅宅もあった。雨や雪が降ればさらに大変な道かと思うが、先生は要緊のある限り訪問を続ける方



牧場では馬の世話などが体験できる

飼育し、動物の世話を通じて命に触れる機会を作っている。

また、田畑の管理や兼業農家でもある。土産を買い取り、兼業農家でもある。他にも、一休半足元のわらじの数が数えきれない。

「やっぱり、暮らして取り戻さなきゃいけない」と力をお込める先生が重視するのは、この土地で人々がどのように暮らしていくかということだ。「このように」を考へ、自分がまず実践していく。4人のお子さんたちも毎日馬の世話をしているという。

取り戻したい、暮らしたのなかに、産生から終生までの命のサイクルが密着した生活が含まれているのだとう。死は他のこととの関係性認識に依存してい

針だ。

看護師が支える24時間体制

また、診療所では24時間オンコール体制をとっている。時間外への診療への電話は、看護師が持つ携帯電話に転送される。いつでも相談ができ、看護師が赴いて容体を確認してくれる。在宅で通ず患者さんにとって、非常に心強いシステムだ。しかし、日中は診療をこなし、夜間も交代で電話を受け持つ看護師の負担は大きい。ぎりぎり運用できている24時間体制は、今の人数を確保できないと継続が難しいという。一現状は調渡りだ」と先生は元を落とした。



壁には患者さんの作品がちらり

電話の内容は、急な診療依頼や体調の相談のほか、日常の相手事もある。「診療所の看護師は必要とあるが、急性期病院とはまったく必要が異なる」という意味でもうとる。地域を通じた看護師としての姿勢と先生が語るように、看護師たちへの地域の信頼は大きい。

壁から観望スー

村ぐるみの密な連携

病院との連携については「長野県の医療連携は素晴らしい。救急搬入の患者さんがほとんど断られず感動した」と話す。また、秦草村は介護保険制度の導入以前から、医療と福祉の一体的提供に在宅福祉に力を入れてきた。そうした歴史によって数々力を受けたという先生は、先生が目指す方向と合致しており、今はその協力を存在させることを大切にしているという。

宅と先生は話す。さういっただ意味で、在宅死は重要と認めている。在宅死は、地域で生き、そのまわりの関係性でその人の死を認めていくことだ。先生の前には、「在宅死は「暮らした」の場に「死」を介しコミュニケーション」を引き起す」と書かれています。在宅福祉に力を入れる秦草村のスタッフと先生との医療者や活動は、確かによくなっているように感じました。

一緒に暮らしている

これらの抱負は「手広く依存関係を作っていく」と、依存しないといけない。自他の自立を上手に促進していきたい。村の方々に伝えたいことを伺うと



く、顔や名前が浮かぶか6人一人一人にお伝えしたい。これはそれぞれあること、共通して「ここ」一緒に暮らしている」と伝えたい。という思いを語った。医療行為だけでなく、思いが望むように生きるために必要とあるあらゆる分野との連携をもって生活をまこと支えようとする先生は、一人一人の患者さんに対してとても優しい視座を向けている。自分を作らず正直に構えてくれる先生だからこそ、スタッフや患者さんたちも、自然と笑顔になるのだとう。これもまた村人同士の密な関係性を維持していたのだとう。



スタッフの皆さんと